
少女とネコと魔法

東京在住のhazeyama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女とネコと魔法

【Nコード】

N3713K

【作者名】

東京在住のhazeyama

【あらすじ】

猫の言葉が分かるようになってしまった少女。彼女を中心とした仲間と彼女の運命が変わった。（一応ギャグコメディです「多分」）

プロローグ

「あたしの主人になって」

「・・・は？」

ここはペットショップ。私は凡人だった。で、最初の言葉は目の前にいるとある白い猫。

「ん？どうしたの？」

「いや、なんでもない」

なぜだ！？、いや、心当たりならある。そう、心当たりは。

——1日前、猫里寺前

ねこざとでらまえ

私は少し急いでいた。理由は、木下（副生徒会長）が休み、今日の会議のレポートを渡すためだった。しかし、自転車を跳ばしたのがだめだった。

ガシャン！

綺麗に転んだ。それだけじゃないさらに何かに頭をぶつけた。

で、そのときは何もなかった。だから普通に渡した。

で、現在。困ったことだ。なんせ、猫の言葉が分かったからな。

ところで、困ったことは二つだ。

一つ、猫の言葉が分かること。

二つ、あの夢をもう一度視るようになった。

プロローグ（後書き）

初めての小説。読者が楽しめたら嬉しいです。
（4月から中学1年
です）

生徒会のペット

「この子にしよう」

生徒会書記の観風かんなぎ 司つかさが言った。というか、

「なぜ保健所じゃないの？」

「だって、きたな・・・」

そのとき、会計の金田きんだいち 一真かずまが止めた。ちなみに、かの有名な探偵とは関係ない。

「保険所にいこう」

「・・・ですね」

そう、かなりの動物ファンだ。野良を見つければご自慢の豪邸に持ち帰り、いじめている子を見つければ鬼も泣く顔で怒る。そんな奴なのだ。

で、保健所。

「えーと、白いのと黒いのだっけ？」

「ですね。アンケートで1番多かった猫の色です」

副会長の西済 なのは（にしずみ なのは）と、金田一は話している。で、私かというと、

（頼むから静かにして）

猫語のオンパレードのど真ん中で大変だった。

「誰が貰われるかな？」

「やっぱりあのスミレちゃんじゃない？綺麗だし」

「でも、あの子わがままだから捨てられたんでしょ」

「でも人は私たちの言葉分らないから、にゃーとなければほらトイレとか、煮干しとかね」

あまりに五月蠅いので私は言った。

「貴方たち、一番可愛そうな猫とかいない？」

「あなた私たちの言葉わかるの?!」

「まさか、あんなのが分かるわけ」

「あるわよ」

さらに追い討ちをかける。

「そうだ、貴方たち全員買わせられるわよ」

金田一なら。

「ホント？ならね、あそこの端っこにいる黒い猫いるでしょ？」

と、目の前にいる白いのが言った。言われた方向を見るとねている黒い猫がいた。

「あの子だけでいいから貰ってやって名前は（黒輔）くろすけ」

「ありがとう。絶対に貰うよ」

そこまで話して、

「おい金田一！」

「だからあの子が・・・ん？何？」

「貴方の家ってかなり広いわよね」

「そうだけど・・・。まさか！」

彼が驚く。

「そうよ、ここの施設の子たち皆変えないかしら？」

「え！！！！」

生徒会メンバー全員が驚く。

「・・・待って、聞いてみる」

と、おもむろにケータイを開くと、

「親父？僕だけど、施設の猫かっていい？全部」

と、その後と言った言葉に度肝を抜かれた。

「あ、そうだ今日は僕の誕生日だよね？プレゼントとして、いいよね？」

さすがだった。彼はケータイを閉じると、

「OKでた」

「よし、おじさーん！」

私は業者を呼ぶと、

「ここの猫全員貰うわ！」

「いやー。たくさんさんの命が救われて良かった！良かった！」

帰り道、私は喜びながらあの黒輔を抱きながら言った。

「本当ですね。それにしてもよくあんなこと金田一君に言ったね。

ヒメ」

「いやいや、金田一のおかげだよ。誕生日プレゼントにしちゃうなんて」

と、そのとき、

『キーン』

何か不思議な音がした。

「皆この子頼むわ」

「え？チョットヒメ！」

私は走り出した。

生徒会のペット（後書き）

なんとかかけました。先の長い話ですが、文庫化狙っています。

夢

「確か、この辺りのはず・・・」

少女、神崎^{かんざき} 魔李阿^{まりあ}は走っていた。

場所は高町。彼女がすんでいる町だった。その時、

『ゴン！、ガラガラ・・・』

何かにぶつかり、それが崩れる音だった。

「急がなきゃ！」

タッタッタ・・・！と、彼女の走る音がただ響く。

もうどれだけ走っただろう？ 神崎はようやくそれを見つけた。

「なに？ コレ・・・」

目の前に広がっていたのは、神崎がいつも朝みているアニメのような、戦い。互いが光る玉や槍を出しては撃ち、来たものは避けている。本当にアニメから、切り取ったようだった。

「！、危ない！ 離れて！」

一人の少年が叫び、こっちへ来る。その瞬間、彼が消えた。

「キヤアア！」

なに？ なにが起こったの？ 誰か！ まさか、死んだ？。

彼女の頭の中は「死んだ」という言葉でいっぱいになった。

そこから先は知らない。だが、目が覚めたらいつもの自分のベッドに寝ていた。

「・・・夢？」

まさか、あんなことが起きたのだ。

その瞬間、彼女は自分の部屋から窓を見る。木を見れば小鳥はさえずり、近くの空き地を見れば男の子が野球をしている。

そう、何も変わっていないのだ。何も。

そのとき、部屋に母、神崎^{かんざき} 有阿^{ありあ}が入ってきた。

「あら、起きたの？熱は直ったのかしら？」

「熱？」

そんな、知らない。

「そうよ、貴方は学校の帰り道で急に苦しんで倒れたのよ？」

「・・・」

「で、お医者さんに視てもらったら、ただの風邪だって」

魔李阿は驚いていた。

嘘、でも皆は知らない、本当に・・・夢？

「頑張屋が父親譲りなのは分かるけど、体は大事にね？私は下にいるから」

有阿はそう言って、階段を下りていった。

「あれ？なに？これ」

机の上にあったのは、青くて、楕円形の宝石が付いた紐のペンダント。

コレが、全ての始まりだった。

夢（後書き）

頑張りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3713k/>

少女とネコと魔法

2010年10月28日05時59分発行